

鐵網錄



特別
14
1919
17



○梁山泊之訛

俗傳宋江三十六人據梁山泊此誤也按徽宗本紀候蒙張叔夜兩傳紀江事者並無據梁山泊之說惟蒲宗孟傳言梁山泊多盜宗孟痛治之雖小偷必斬其足盜雖衰止而所殺甚多孫公談圃云蒲宗孟知鄆州有盜黃麻胡依梁山泊為患云此是神宗時事與宗江之起事宣和者已相隔數十年矣

隨園隨筆

○禽即獸

古于禽獸二字不甚分明書稱外作禽荒禽者獮獸之稱易稱即鹿先虞以從禽也以鹿為禽周

禮大宗伯以禽作六贄有虎皮豹皮亦以獸為禽賈
公彥疏已孕曰獸未孕曰禽直合而為一矣禽以雌
雄名而左氏稱龍一雌死則獸亦可稱雄獸以牝牡
稱而書稱牝雞之晨則禽亦可稱牝牡同上

○借妾

宋稗類鈔載陳了翁之父尚書公与潘良貴義弟之
父交好一日潘謂陳曰吾二人爵齒相似獨一事不如公
自傷無子也陳曰我有一婢已生子矣當以奉借他日生
子須見還耳已而遣婢至即了翁母也未幾生良
貴母遂往來而家為一母生二名儒當代宗之宋人家
法最謹素而此事皆今人所不為同上

○伊尹非名

尹正也湯奉之以正天下也是令尹之尹非其名也伊尹名
執事而亦自称尹躬見孔疏同上

○王嬭非名

王嬭嬭官也嬭妃之稱非昭君之名同上

○莫愁非女

宋曾三異云莫愁乃古男子神仙隱逸者流非女子
也見劉向列仙傳楚之石城有莫愁石象男子衣
冠甚偉同上

○龍陽君非男寵

國策本註龍陽君幸臣也鮑彪正之曰是幸姬非

幸臣也 日上

○神留書

東江書院に書畫に巧き人王候大人に仕へ其の傳書
畫の多く少くことを惜て其の心のまじく書畫をこく
せきしむるをゆゑる事と云ふ事あり言傳ありこ
ころを境地せまき事と思ひし中書するその例し
あり米宗寧中米元章と曰く書畫博士の
方よりさうし李の的雍と云し人或勅命に因て林宗
を跨鞍と云ふ大字を書ける事ありしとき、
見すもよきけりゆゑも中書の師人我もくと云
ふ事ありし事書に李の的雍の師と挿しける事あり

いふ事ありし事書に李の的雍の師と挿しける事あり
が衣のやうと云ふ、うねる事を書けりし人、
七事の書の外圓くせんことを書けりし人、
絳色の紗をいし李の的雍が師と云ふ事ありし
事ありし事書に李の的雍の師と挿しける事あり
書に李の的雍の師と挿しける事ありし事あり

○田沼氏のゆゑ

帝を田沼氏執政のときその家系井上伊織跡ある
ゆゑにその家系をその家系と云ふ事ありし事あり
官の家司に貸財馳走の事ありし事ありし事あり
き謂を請しが取次云ふ事ありし事ありし事あり

年皆不賤、奈何夫子獨長貧、王曰、吳廬少產有
言、貧者、上天所設以待子者之清俸、金陵吳人、茲
亦言、天以貧德人、今處儔類之中、天幸德我、特頒
清俸、義難獨享、願以共卿、婦曰、君意良厚、
但不知何日俸滿耳、

婦、姓鄒、文學公適女、十六歸王、布襦操作、容至供
饌、惟謹、一日王欲留客、適無錢、大为踴躍、入
謀諸婦、故難之曰、身所有、祇此髮耳、惟君所
裁、王曰、卿未嘗倩筆畫眉、願乃假手、截髮、婦
笑、拔簪、付之、
今世說

○儒者猶廉

韓非子曰、儒者猶廉、吏猶馬、
曰、月之有、
一七紀、
銀の、
の御、

○微菴の抄心

聖天子の、
と、
の、
や、
と、

あまのりく 景瀬かたりしし 伊左夫おのり 一方の
頭を呼ぶかたをひし 勢ついでに 命をけりしと 勢
或人 伊左を問ふ 天王 伊左といひ 命をけりしと 勢
しきや 或人の 伊左の 勢ついでに 命をけりしと 勢
きくや 伊左を 問ふ 天王 伊左といひ 命をけりしと 勢
あつみ 伊左の 勢ついでに 命をけりしと 勢
火をくえし 伊左の 勢ついでに 命をけりしと 勢
まをくと 伊左の 勢ついでに 命をけりしと 勢
けりしと 伊左の 勢ついでに 命をけりしと 勢

○ちかろなる人のよ

或の回をくえし 伊左の 勢ついでに 命をけりしと 勢

まをくと 伊左の 勢ついでに 命をけりしと 勢
あつみ 伊左の 勢ついでに 命をけりしと 勢
火をくえし 伊左の 勢ついでに 命をけりしと 勢
まをくと 伊左の 勢ついでに 命をけりしと 勢
けりしと 伊左の 勢ついでに 命をけりしと 勢

○天焚置

天焚の初年 ちかろなる 伊左の 勢ついでに 命をけりしと 勢
あつみ 伊左の 勢ついでに 命をけりしと 勢
火をくえし 伊左の 勢ついでに 命をけりしと 勢
まをくと 伊左の 勢ついでに 命をけりしと 勢
けりしと 伊左の 勢ついでに 命をけりしと 勢

亡見(録)

こが故に物をはけりりあまをいせぬ息ありのまけりとのみ
すうまきともうらん早を物々せのけきろよせとあし
おもひのせせいのるえ向いそいあむらひかきまう
誠らしくしを俄に油しとせけらふいふも美味
れんちやくとまへしとまへてけらるる利即やうとれを
あませまうらん其行修の魚の故に物とまへ
すらうるとやくんおまきとけけらるるあしとせせ
名をのりとなまうあまをまけらるる立足すこしとる天
敷羅とまきとみせけらるる利即やうの影もてんおら
るいこまういこんやこいこの立見うちるあまうとせら
はら天呈浪人きふらうとけけらるるまきとせまらるお

かえあうとらう、えん天のまのてん即物とらうふらう
斐尾の二字を用ひたるは、麦の粒のうすまののた
かきまういづれとせんとせんと利即の酒及ぶ
男か天呈浪人のぶらうともあまてんぬらう面せしと
まひみせせとせまうとまき行修をおまきとまをせ
けらるる立見まうとまをまけらるるま(一)十六(二)章十二
三の節をいへるこ二十の節の考まうは天敷尾の
名も文字も海ゆの法候すとも立見ま候節ら行
修も余り天敷尾の行修をまきとまめ利即
まき弘しとるあまらるるま(一)十六(二)章十二
まきとせまう

○笑話二則

姉妹同居或遺之松茸置米櫃中姉從外回聞之曰松茸
忌米氣風味之敗妹未信姊又取證曰是故禱禱
不糊

邦言呼斂为志和与信託音也文政中城北有僧謎僧
書生奉謎曰天民僧解之曰章魚書生又奉曰五
山又解曰老妓書生不懌而曰天民五山二先生詩名
雷轟于天下學者景仰以为一代泰斗汝何曾比之
於老妓暨章魚也 不倫之甚僧謝曰走文育直
据所聞而言之夫章魚之美止在右手猶天民在
處亦止在左手歌妓年老面有斂不售五山亦有法

法故云 如是我聞

○ぬめりの感潮

初代市川ハろね舟船中船ハ從あやの美男をぬめ
ろといひぬきませきんさき中車うせなるあや
初七のぬめの美しき多く浅き心のさきさき
まき印一と京山母のあやをまきぬめ新中車の
紋糸をつけし船のかんさし舟信の婦め子
向の心をも地上にあまをさしあましとを又戒
める足つるをさしよ一とそ京山の船の糸
巻る見むとのぬめろる馬鹿けをこと
のさきぬめり

うつらの仲町の娘を通しとうしと或る此娘の婚を申し
うかつらの指しあひけしをぬねまうらやみおあを怒りて
結しせけしんほら心をはり候と定あけるん結するよ
多うしあかつら作をやめし娘の婚を結あを泣きと
しけり甚えとしよ氣き男あるとうら心をもる文づ、
るを娘家の仲をももの婚を申あひけしんるつ、ある
さんくと呼れつしんるんとさうけり此る止意を言候
天の姫女のぬら田の婚を泣きをぬみけることを云ん
女の世まさるる女の婚を結あをを習いしん此よ
あは八町地大井とこころは住氣をあるも或は十六
ひよの杯あひあうき、女のゆりあうをあるは婚をすも

るを結、廻して結ふうか地世を結しんる事あ
ころ結りころとを伝ふ識るるれ地志風う候地世
る御さうけりこら夏あこころの流るる是世に結
結といふ志願をうするぬるさうけり(うお年お天保
十正申辰大坂城に二十五年神徳と云事おぬるの年
教つを記しなすしよの世に結り候あしんるさう
あは世の件のみ心うあつらうつけ候の婚を結
の、世に結を泣きと一なるも大坂の風をようさ
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
因るさうさうさうの用あも毛いゆとこころあも彼の
るさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

賜ふたぬ一るを言ひにせしむる年々其の定額
七ころのむらう此類のしきりなるの流れを言ふしを
ふくのふらふをせしむるの中いふの白紙をふけ
るとをたぬるも通へるおふの料に存るなり言ふ
る一福田のしきりなる大黒子孫言ひし類の甲子
念類ニおまを言ひし類のしきりなる類の甲子

○論説の異字

談経苑の白石渠と名見曰为仁由仁而作人盖欲上
文其为人而言也と見ゆ又韓退之の論説筆解の
浴沂の浴の字は沂の字の誤也又吾以女为死矣とい
死の字は先の字の誤る此類の猶多し又書一復也

りの書畫の字は畫の字の誤と梁武帝の説は華解ま
と是の字を元用ゆ先哲の退之の云く為聖経を改む
の非を論す又皇侃の義疏、異文間多し 聖経

○貧書生

伊勢山田東、鋸両亭漫随筆、云余在浪華一日米
薪俱盡、囊無一錢、僞居日淺、無所假貸、自謂坐而
忍飢、不如卧而忘之、就枕而睡、及覺枕上有炒麦粉
一包、不知所自、問之隣人、曰嚮有持厨夫、擔亦便去
蓋其所對易云、乞茶喫之、得以一飽、是夕街上吹
笛、按摩教人、獲百餘錢、實余少年客中第一厄
也

○都々平丈我

近時句讀師學問淺薄、不過都々平丈我、而自公然不愧以師自任、弟子亦仰為一先生、鄙談所謂一育引衆育者、委巷叢談云、曹元寵題村字回云、此老方捫虱、衆雖爭附火、想當訓誨間、都々平丈我、詔雖調笑、而曲盡社師之狀、杭談云、社師談論語、郁々乎文哉、訛為都々平丈我、委巷之輩、明而不悟、一日宿儒到社中、為正其訛、字章落駭、散時人為之語云、都々平丈我、學生滿堂坐、郁々乎文哉、學生不都來、曹訪本此、隨園詩話或談村字完云、漆黑茅柴屋半間、猪窩牛圈浴鍋連、牧童八

九縱橫坐、天地云黃喊一年、二詩能極其趣

鈕而亭
隨筆

○嗚呼忠臣梅氏之墓

鈕而亭過華云、或謂此碑祖下唐玄宗題張說父碑云、嗚呼積善之墓、玄宗亦有所本、吾丘衍字子古編、延陵季子十字碑在鎮江、人謂孔子書、文曰嗚呼有夏吳延陵君子之墓、按古法帖止云、於乎有吳君子而已、篆法數古似乎可信云、朱子書蔡西山墓碣云、嗚呼有宋蔡季通父之墓、亦效延陵十字碑也

○夕陽黃葉村舍

近來茶山翁名其集曰夕陽黃葉村舍詩、世人

以為新奇，不知夕陽黃葉村舍沈德潛所居之名，出唐詩別裁序。

○野狐落

唐書溫造傳大和二年內昭德寺火延禁中野狐落，
野狐落者宮人所居也。唐朝文物一時盛矣，而
宮中有此卑名，抑亦不典之極。鈕西亭

○賈夢

東國通鑑云，新羅武烈王妃文明王后金氏，
信之妹也。初其姊寶姬夢登西兄山頂坐旋流，
編國內，竟與文明會。文明戲曰：願買兄夢，
因與錦鏤為直。後武烈與庾信蹴鞠，庾信故

踐武烈衣紐落之。庾信曰：吾家幸近，請往綴之。因
與俱往，置酒促客。啜寶姬來綴，寶姬辭曰：豈可
以細事輕也。貴公子乎。文明乃進綴，紐美而艷，武
烈悅之，仍請婚。遂生男，源公夫人北條氏買夢相
款。全上

○詩題犯徒以上罪者

詩之妙在韻致，不必以理勝也。歐陽公與人行令，
各作詩兩句，須犯徒以上罪者。一云：持刀哄寡力
婦，下海劫人船。一云：月黑殺人夜，風高放火
天。公云：酒粘衫袖重，花壓帽簷偏。或問之，答
曰：當此時，徒以上罪亦做了，一殿巧婦出于意表。

東坡云、賦詩此詩定非知詩人

鈕面字

○眼之のをさる

徐夔陵詩、相看不得語、春意眼中來、靈詩道法、深傳出艷語、春意滿橫眸、二詩一意橫眸最艷、而不加徐詩之含蓄無限、然亦有據、劉孝綽詠眼詩、欲知春中意、浮光逐笑迴

全上

○風月無邊

唐伯虎題收湘英家匾云、風月無邊、見志皆贊美、祝枝山見之曰、此嘲汝輩為虫二也、湘英問其義、枝山曰、風月字無邊、非虫二字、湘英終以為美不之易、按俳諧歲時記云、出羽尾花驛里

正家所藏角力繪芭蕉句用風月字蓋祖此意

全上

○寄物以寓微意

古人寄物以寓微意者多、左傳士會乃行、統朝贈之以策、杜預注、策馬槌、臨別授之馬槌、並示已所策、以展情、晉書姜維歸蜀失其母、魏人使其母手書呼維、令反、并送吉帊、以辟言之、維報書曰、良田百頃、不計一畝、但見遠志、無有吉帊、遠思當帊、并藥名、通鑑綱目、靈循遺劉裕益智粽、裕報以續余湯、注益智子味辛溫、主益氣安神、循以益智為粽、遺之、蓋言劉裕智氣窮也、續余

湯成藥名治中風不省人事。裕以此藥報之。蓋言循
不省事也。又王國珍獻明鏡於蕭衍。斷金以報
之。注鏡所以照物。獻鏡者欲衍照其心也。易二人曰
心其利斷金。故衍取以為報。魏書奚康生傳。蕭衍
直闕將軍。徐玄昭成於郁州。殺其刺史張復。以城內
附。詔遣康生迎接。賜細御銀纏梨一張。并奉奈果。面
勅曰。果者果如朕心。束者早遂朕意。隋史李穰使
子津奉慰斗於楊堅。曰。願執威柄以慰安天下。又以
十三環金帶遺堅。十三環金帶者天子之服也。通鑑
唐紀雲南王異牟尋遣使者三輩。冬齋生金丹砂
詣韋臯。金以示堅。丹砂以示赤心。明史張山頂傳。

寧王宸濠欲拓地廣其居。山頂執不可。大恚。遣人餽之。
嶺。昔視之。則束梨薑艾。蓋隱語也。按束梨薑艾。即
罕理疆界之意。李長吉詩云。夜書題薑蔻。隱語笑
芙蓉。按薑蔻一名相思子。芙蓉蓮也。蓮與憐音同。
鍾雨亭
隨筆

○孟詩話

全唐詩話云。權巖。衰好賦詩。而不知聲律。常作秋
日詠。懷詩曰。簷前瓦七百。雪白後園僵。飽食房中
側。家未失。巢野帳。冬軍問之。權曰。鷄子簷前瓦。直
七百。七種穀。鷄子者鷄。乃擊鳥。瓦。洗糝。掛後園。白如
不太高。擬今紙。瓦之不起者。飽食房中。側臥家。裡便轉。巢得野澤。蠅。帳。

聞者笑之。拊掌錄云：宋哲宗朝，宗室子有好為詩而僅
鄙可笑者。嘗作即事詩云：日暖看三織，風高飀兩廂。
蛙翻白土潤，蚓死紫之長。撓聽琵琶鳳，餒拋接連
韋。歸來屋裡坐，打殺又何妨。或問詩意，答曰：始見
三蜘蛛，織網于簷州。又見二者對于兩廂，有死蛙翻
腹似去字，死蚓如之字。方喫飯，聞隣家琵琶作鳳栖
梧，食饅頭未畢，聞人報建安韋秀才上謁，迎客既
歸，見內門上畫鐘馗擊小鬼，故云打殺亦何妨。哲宗
嘗灼艾，請內侍欲娛上，或奉其詩上，笑不已。竟不
灼艾而罷。

○樂天樂地 李白李赤

東方虬嘗云：百年後可與西門豹對。鄭少師於里第植
小松七本，號七松處士，嘗曰：吳代可對五柳先生，二子
名號謂此古人對，其自任亦大矣。但未聞後世有亂
對豹七松配五柳之語，蓋其為人邈然不可等之故
乎。近讀國朝詩別裁，倪瑞璿詩云：人生重賢真家
不在名字美，難以易相方。赤將白自比，豈遂足追
配。效顰罕空復尔，自注：唐進士黃居難為詩慕白
樂天，故名居難，字樂地。李赤自比李白，詩人玉屑
東坡云：余嘗舟次姑熟，堂下讀姑熟十詠，恠其語
淺近不類李白，王平甫云：此李赤詩也。云：雲雪錄
所載慕太白者，張璪字大珣，慕樂天者，黃居

誰字聖地又富家子杜四郎自號荀鴨以比杜荀鶴
者尤可笑也 但而亭隨筆

○罵罵所以止罵也

晁氏客語云止罵所以助罵罵罵所以止罵也此法善甚
人情 全上

○漢人稱物過其實

漢人稱物動過其實故後書者不可不察晉書馬隆
傳依八陣圖奇謀間蒞或夾道累磁石賊負錢鏗行
不得前隆卒悉被辱甲無所留礙賊咸以為神所謂
奇謀者不免兒戲也水經注磁石門在阿房前悉以
磁石为之令四夷朝貢者有隱甲懷刃入門而脅之以示

神故亦曰却胡門此亦過稱耳琥珀吸芥磁石之引
錘虽曰造化自然不足深怪如此二書所載恐是
迂而誕矣 同上

○見白髮而喜

方鵬知足吟云人見白髮悲我見白髮喜多少
賢達人不見白髮死高才李長吉有道文中
子行年未三十相與歸蒿里吾生已倍之對
鏡宜莞爾達生之語足排老愁 况千運詩近世
多文傷喜見

鬢髮白
况唐人

○摩那伽那

撰我馬百潭云中國科斗書梵云摩那書又葇

轉書云、伽那跋多書、邦俗所稱、假名真名寺是摩
那伽那之累也 鈕市亭

○百悔經

十國春秋劉乙字テ真常乘醉與人爭妓、既醒慚悔
集以酒致失者、為百悔經、不飲至於終身曰上

○厭勝錢 繪錢

古錢の種類ハ式万ありやちんうううう大おそまも
内外四錢あり而して支那錢ハ古文錢あり平錢あり
厭勝錢あり日本錢ハ正用錢あり繪錢あり是等の
古錢中まゝ人の最もまゝ人々多政すううう日本の繪錢
支那の底縁法あり



釣成



假名念佛



屋形

繪錢ハリありし物也し玩弄錢うう
さう通目やうしものうううう種々の繪を
鑄せりうううう繪錢と云ふ今之を分
類せん是利の六條錢寛永府の樂錢
日代後日量は以代の正名錢也混
リをうううう是利の六條錢と云ふ是利
以代ハまゝ都の六條錢にて鑄名也
ハ又おふ賜ひしものをまゝ和同升錢と
稱す銅鉄即志而六の上りし和同
と記し其左志ハ其の形を鑄せしものぬき是
此ハいふそのさういふなる其價も貴く此代是利の

福壽永昌	重華萬壽	能斷金剛	斬鬼大將	榮福清吉
壬王大王	百千長壽	福壽雙泉	福如大海	合家清吉
金玉滿堂	日光千里	招財進寶	趙麟特勤	長命富貴
天清豐樂	大定無憂	財源廣進	宮本七星	福祿壽
後漢耿弇	吳將孫武	道將散騎	龍鳳	單龍
清漢留虛	汗血	印馬官風	赤龍	馬龍
龍馬	願駒	魏馬官風	奔馳寶駒	瑞馬
千男二女	永通泉貨	長保生命	長命富貴	福祿壽
宜保子孫	加官進祿	張天使	本武大鏡	大上元文
福保祐	靈星官	雲月星官	天旗星官	真武星官
靈真長壽	四珍鹿鳥	靈鹿星官	龍文	金玉滿堂
花鳥	兩人憂神	千里之能錢	大泉五十錢	農龍

生衣大... 直行二十四分... 銀の... 武大鏡の... 銀の... 三...
 兎文を... 今... 泉... 鑑...
 上の... 存...
 以上の... 文... 圓... 鑄...
 古鏡... 末... 代... 前... の... 物...

元禄の... 注... 候... の... 流... せし...
 の... せし...

○蹲鴟

梁一権貴... 漢本蜀都賦... 注解... 蹲鴟芋也... 乃为羊...
 字、人饋羊皮、答書曰、損惠蹲鴟、唐馮光震入集...
 賢院、校文、是、又注蹲鴟为今之芋子、即是着毛...
 藟、張九齡、知蕭、吳不子、故相調諺、一日送芋書...
 稱蹲鴟、藟答曰、損芋拜嘉、惟蹲鴟未至耳、然僕...
 家多在、亦不飲此惡鳥也、一出顔氏家訓、一出譚...
 録、一出諧謔録、并令人不堪捧腹、銀...

○呆物四

人央画六令回天下第一等痴呆画工沈吟再三援筆
做垂釣回其人怪曰天下射利者皆釣徒然徃之奇
中猶有甚焉者画工又補字信觀一人

如此我少

○大石

文政中名儒某追頌赤穗藩臣大石良雄等精誠烈忠
所以動天地感鬼神之義建一巨碑於高輪泉岳寺
以詔于天下于永世焉于時吉良氏親臣之裔有堅
執義不肯仕者之聞之不能平乃相與上墓焚香而
告曰皇天多辟我君慎無辜究賊良雄彼何人
叨膺美名千歲不辯頃又措大相謀立碑頌德士
庶男女四遠風動傾城瞻禮以為曠古盛事獨奈

我君墓道荒蕪草莽不除鳩鴉晝啼湛露沾
裳臣等二人泯以慙愧無勝感勝爰款二臣貨包
有金百兩亦足以脩墳墓建巨碑以雪神羞矣
烏摩神之有知其慰悅于泉下也而已至誠感神
瑩域震動忽然去良子之室形見謂二臣曰深欽
厚德感甚汝文可謂吾家良雄矣但欲為全
新之碑大之不以驚世駭俗是大不好事豈止之勿
復言焉二臣噩然清問其故去良子曰汝等不
記乎吾微創於大石矣

○屈原沉湘之疑

黃石牧太史云、屈子未必沉水死也、其文曰、吾將從彭

咸之所居之曰賴依彭咸之遺則又曰寧赴湘流葬於江魚之腹中皆憤怨之寓言非實事也太史公因賈生一乘遂信為真不知宋玉親受業其門而招鬼之作上天下地東西南北無所不招而燭不及於水何耶惟亂曰湛江水兮上有楓鬼兮歸來哀江南則其美終於汨羅可知也若楚詞注謂招鬼作於屈子生時則緣凶非禮宋玉不應詛其師矣隨國逸筆

○項羽有始皇之子之說

神仙傳稱始皇與龍女交有及子生兒棄之沙灘項梁救養之長大有勇能自曳其身而飛數步故名之曰羽同上

○病味亦佳

毛稚黃買才善病六載起處不離抹榻人以為夏毛自荒曰病味頗亦佳第不堪為執蹠道耳今世說

○簡傲

汪鈍翁頗自惠嫩放並以此視王西樵王芑爾曰長安車馬喧闐荒無吾黨一二孤寐者點綴其間便成缺陷同上

○誤形名為刑名

申韓形名之學其法在審合形名故曰不知其名後修其形今稱為刑刑之刑誤矣隨國逸筆

○十二月、十四月、十九月

首尾の急をそのつねせて

秀菴の梅もおいし切りさ記 望坡

といふもさういふに花さいつつのもさやむ夜も向く志
あくの頃也盗人手を打て歩ゆは世なむさせさく
せよのちうきころ刑せんとしたるつけあるつけ
若くして遊ぶ後くこさ言のあさうしむ句な
んぞくくはうきうんやたか回く苦い歩をま
さむを風人といよをさうらうとさおしうてんじ
阿の目しう向ふ心く我々盗人の中痛也は阿
事七志とぬさめうとかくいひうらむをまぢとあ
ふ

垣くはる者さうさう書のい

○惟然坊 日上

あつとき折言歌寺の門よりを新中書まゝ難皮
をなをさうらうさうのあむさうらう世なむくうはあ
たさうしうあう狂心おさゆるよとさめむとま
おのしめをさうらうをまきさうこい枕をさめ坊
こころさうあやいさうさうのあくのままむあむさ
みくうもせさぬけやし我娘の娘うをける丸世
入して何をさうけけんが娘たもとすすうらえさ
さすこの絶のおこらうをさびあさうしきさう

きくげすんは白菊の移りく人衣をぬぬ花のいづこよ
ゆきんみも支支あめを移り我手トの伝言も
ゆきんみつーやくと彼向をさういふ吹す人音年
肩をさうて回いみとさぬ人花よりくもくたぶ
くうて我を行脚のぬらさるる地竹今も
句也いゝまゝ来らトあを支支あるを
年う背中をたゝきあさうのこもす
うあといを捨て山をくたう 全上

○芭蕉翁近江行脚并跋

おきま一とそぞの付守山を移り松蔭を行やすら
うたくを見んないろ一まきも念いのま松蔭げな

蒸をんやうまやうてふ籠のま忍のいとせむさる
爪の皮拾い入やん一扇を籠おいるがう一移あうこの
一めいああ一と三とまう一さ一うたう目
さいま又あま記舞う移もこのあ一とま
いひえぬひま一とれい一とえをまあう一と目
さうまを 懐おけし

書白の全麻やものみの

折うううも此がこ折の記は世のあまのこはら
のゆあろ一董うくたかまみ木の古あこはら
うこそ 解のたうあまうをまううううう
るまう空うけたうをのいずとをあうう

やみつん時をうりていとう多みたる程ありし松
風ゆりしは睡流いとことみく人の口すさびる
をいば人をとるこころおのころあせせんちこ
寄て志うくのあつまずきをよとよおのこころ
いづて人の身をあらうよの念のよる眼をさ
ぎに腕のたうくとあつまずくあはれを袖をこ
生袖をまのよのよとつらうやの物をくいつて
いゆるとさめたる甚う特う来きよとあらし
あらしをち抱えたりしむをうの八珠の古打を
瓜の蟻をえらへておろしを味の程あるこころ
も志うする所せと白き筆をあらうこころを
えのあ

あつん時をうりていとう多みたる程ありし松
風ゆりしは睡流いとことみく人の口すさびる
をいば人をとるこころおのころあせせんちこ
寄て志うくのあつまずきをよとよおのこころ
いづて人の身をあらうよの念のよる眼をさ
ぎに腕のたうくとあつまずくあはれを袖をこ
生袖をまのよのよとつらうやの物をくいつて
いゆるとさめたる甚う特う来きよとあらし
あらしをち抱えたりしむをうの八珠の古打を
瓜の蟻をえらへておろしを味の程あるこころ
も志うする所せと白き筆をあらうこころを
えのあ

ある病状をまゝにして皮膚をさし主治のいさし様とらん
まゝとせう愁い且よろこぶ所とやうくまゝい
ゆるまゝをせし涙ぐみとまゝの甘雨もさむとまゝ
さしつとまきみとまゝ志願文章を身支考とまゝの
ふたの字をたきか病性や死後をおもたる此様か
すうかしておもいようとまゝおもたるそを
ある疾の時こころを所夢のさめたるめく病を
たかよ人の嬉しさかたうとまゝ病中兵衛も計いて疾
く焚けけをすゝめすめとまゝ中うき抱え快ま
めえんけり翔りもことすめとまゝ土鍋の熱く
たるをま身抱うとまゝ入もおしつたとき

病中のいさし様とらん 志願

志願の意向を伝ふものとすゝめあのこととにす
さみてゆを慰めゆめと人深くあまいとと
ふ白ゆくとまゝ惟れのおねと二人と一つの病
園をいつてつて病うしとまゝかまなくいさこるたぐい
きて終夜寐いらさうけんかえとまゝとと松の
けらるをせまうをまゝ笑いぢい

いつてつて病園をまゝとらん 惟れ

おもいよるおねとまゝとらん 志願
一せきをまゝとらんつと笑ひけんか所とえ
いさし様とらん 嬉しさかたうとまゝとらん

花とよぶお梅と名のね越敬鼻くだの木の上七
段と難し教員と稱す廿寸の元とをふく
こととのぬきい自記書おのるぬきうたるぬ
は世の文盲赤金玉と鳥帽子着せしハエ子
たたのぬ油法うえ本々ともさきもさう南鐘
二片の通角うもさきさん金と玉とみえさあつ
うさるす申あさうけしおあ世終るを二交
一と山名の開る隠るう前まる神國修年天の
逆鉾をあつましほろる後大師の権掾井上を
とくへへさうかふる神佛の重宝坊あつさうのう
ぬをも信せうおんをも信せう黙々として世をや

一うあぬゆいううとめをう一さいさうあかい
あふのいそあつ悟塔ををみかくのじとを記を
こまにああめあつ年ゆいゆいの徳おさうす文
たあつ塔の白水をさううう長着さうとう六の
一こ

○借用済文 全上

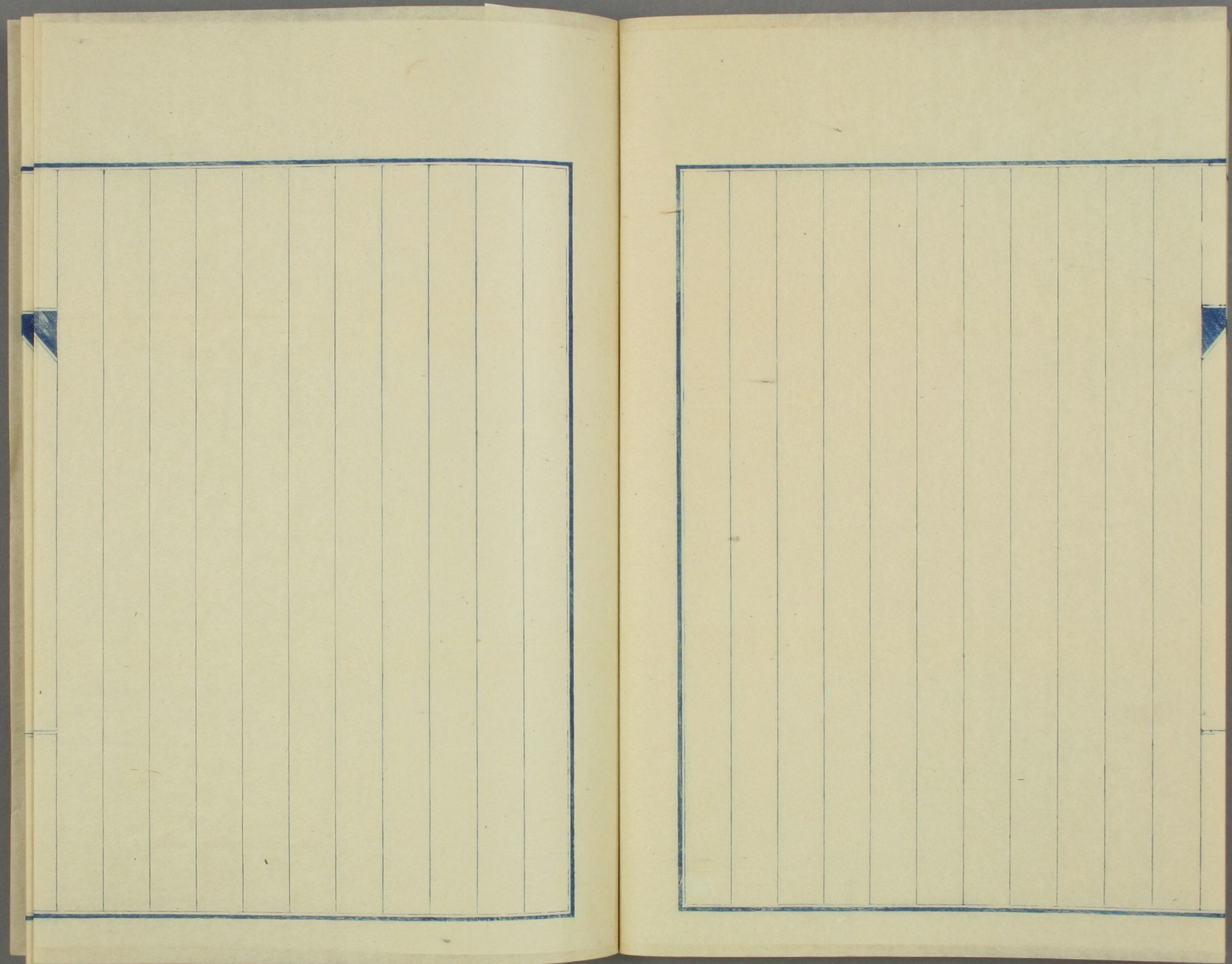
一我がすまに口もさき海へもたのぬきうしてたし
まうこの命いとうとあつうのうしうを流ぬき
佛者あし海を懐ちすうこの草をうたれ
し月言をたさうきいしきうと抱上りまの
うかんらあをぬきさうさうしあふなふいとう

就師の者ももも職事なを回さうとさう尾上角
子とといふら忠臣志の志をゆさし他の後まカの
振く年を十あ計かりしを免角あしとまふいふ人
七ありしとさうとを四日の上使入来の序へ四之
リ形急の候もえまてく花あふカままををいあめ
中二目のま、たふ就士其カをつくくと打守りあ
一坪まの家急の力あまふいあとしははえさうと
ふ中山文七大星カあふも文あおと久也る足九法入
目を急うしとまあしと文あおと中を内を修カ
是方しくくうも久ありき、馳あうと道通く出た
とま山神し社あまし一里は馳つければと

つまじとさうとさうに佛僧たりあ人も等あふ
りしとまあしとさうに佛僧たりあ人も等あふ
罷日市川團十郎の志をゆさし他の後まカの
一と行んとさうとを免角あしとまふいふ人
よひとのぬえとゆ入らうとまあしとさうと
ん見ふあを助をを助とさうとまあしとさうと
團十郎の志をゆさしとまあしとさうと
め、團十郎の志をゆさしとまあしとさうと
呼止らうとまあしとさうと
のま急の志をゆさしとまあしとさうと

〇あはちあはちあはち

其を雙のえ松のすまゝにまゝに切ると
同じ強う本らとの位と一しを本位と夫れを
りを撞の松と母とを撞いあつたことす
とこのまゝと撞を撞木のゆゑに松の
りこのまゝを撞を撞て撞くことす
古の松
は
二



以下全て

白紙

